

故郷を離れた大学生にみられる対人関係の推移

伊崎 純子¹

問題と目的

ホームシックは、英語でHomesicknessと表記される。英語のSicknessは病名のはっきりしない病気を指す言葉である。先行研究を概観すると、ホームシックと精神疾患との関連を指摘するものも多く、個人のパーソナリティの要因との関係性を見いだすものもあるが、環境的な要因も考慮されねばならないことがわかる（伊崎，2012）。ホームシックのきっかけは、留学、進学、就職、結婚、戦争など多彩である。新しいなじみのない環境に直面することと同時に、故郷の慣れ親しんだ環境やそこでの重要な関係性を失うことがあげられる（Van Tilburg, Vingerhoets, & Van Heck, 1996；文献研究）。これは、異文化適応にとって自己価値観とともに新しい環境でのソーシャルサポートが重要だ（LaFleur, 2010；博士論文；横断的研究）という指摘とも重なる。

Duck（1991，仁平監訳，1995）は、友人関係では親しい関係が出来上がるまでの過程ではなく、出来上がった後の「メンテナンス」が大事だと強調している。Roberts & Dunbar（2011）によれば、高校生が大学に入ってから1年半の間、近親者や友人とどのくらい接触を保っていたか、感情的な

¹白鷗大学教育学部

¹E-mail : juniza@fc.hakuoh.ac.jp

結びつきの強さがどう変化していったかを追跡調査した結果、近親者たちは接触がなくても感情的な結びつきは弱くならず、友人に関しては接触が前より減ったケースでは感情的な結びつきが弱まるとしている。

仁平・大平（2008）は双生児の親密さとアイデンティティの形成の特徴を明らかにする研究において「親密な関係尺度」（20項目）を作成した。尺度作成時の因子分析からは「親密さ」「競争」「分離欲求（束縛感）」「アイデンティティの希薄さ」「相手への共感」という5つの因子（25項目）が抽出されたが、双生児に限定しないで親密な関係を測定する場合にはアイデンティティに関する5項目は不要だと述べている。その上で、この尺度は双生児に限らず、きょうだい・友人・恋人など使用範囲の広いものとして呈示されている。「親密な関係尺度」という名称であるが、「親密さ」因子や「共感」因子に表れるポジティブなつながりとともに「競争」因子や「分離欲求（束縛感）」に表れる場合によってはネガティブなつながりも内包する関係性の強さを測定することができる。

ここでは、大学入学を機に一人暮らしを始めた学生のホームシックについて調査する過程で得られた、4年間の対人関係の推移に関して報告する。即ち、「親密な関係尺度」を用い、故郷を離れた大学生の対人関係、特に両親と大学に来てできた親友と高校までの親友に対する関係性の強さの変化を追跡調査した結果を提示する。

方法

質問紙調査

仁平・大平（2008）の「親密な関係尺度」（20項目）に対し、本研究に必要な変更を加えて実施した。変更点は2点である。1点目は質問紙の教示や項目における「相手の方」という表記を「父親」「母親」「今一番親しい同性の友人」「故郷の一番親しかった同性の友人」の4人を対象とした点である。対象者別に20項目に対して「全くあてはまらない(1)～非常にあてはまる(4)」の4件法で実施した。集計された点数が高いほど、強い関係

性を認識していることを意味する。2点目は、一人暮らしの学生が答えづらいと思われる2つの項目をそれぞれ、仁平・大平（2008）の因子分析時にその項目が含まれる因子の因子負荷量が次点だった項目を採用した点である。即ち、項目番号6「相手と離れた土地に住みたい」及び項目番号15「相手と距離をおいて生活したい」をそれぞれ項目番号6「どんなことでも（相手）の助けをかりずに自分の力でやりたい」及び項目番号15「自分が自分であるためには、（相手）と距離を保っている必要がある」に変更して用いた。

なお、調査参加者の基本情報など全体として学生のホームシックに関連する項目を別途調査しているがここでは割愛する。

調査参加者：2012年～2014年にH大へ入学し、一人暮らしを始めた学生累計77名（男34女43）（Table 1）。

1年次からの追跡研究のため、1年次以外からの参加は認められていない。学生は任意で研究に協力しており、4年間を通して調査に協力した場合には謝礼があることを事前に伝えている。調査途中での辞退は認められている。

Table 1 研究参加者人数

入学年次		1年次	2年次	3年次	4年次
2012	男子学生	17	2	3	2
	女子学生	14	5	3	4
2013	男子学生	5	4	4	—
	女子学生	15	6	5	—
2014	男子学生	3	1	—	—
	女子学生	0	0	—	—
合計	男子学生	25	7	7	2
	女子学生	29	11	8	4
	学年計	54	18	15	6

分析対象期間：2012年7月～2015年4月

2012年度入学生は大学1年の7月以降、毎年4月に実施

2013年度と2014年度入学生は、各学年4月に実施

結果

1. 学年による推移

「親密な関係尺度」の合計値を学年（3水準）×対象（4水準）の2要因1変量の分散分析を行ったところ対象の主効果（ $F(3,354)=4.512, P=.004$ ）のみが見られ、学年の主効果、学年×対象の交互作用において有意差は見られなかった（Table 2）。

Table 2 「関係の強さ」における2要因分散分析表（学年×対象）

従属変数：関係の強さ合計

ソース	タイプIII平方和	df	平均平方	F	有意確率
修正モデル	2358.882 ^a	15	157.259	2.667	.001
切片	501331.286	1	501331.286	8502.713	.000
学年	52.985	3	17.662	.300	.826
対象者	798.139	3	266.046	4.512	.004**
学年 * 対象者	257.363	9	28.596	.485	.885
エラー	20872.312	354	58.961		
合計	922650.540	370			
修正総和	23231.195	369			

a. R2乗=.102（調整済み R2乗=.063）

Scheffeによる多重比較を行った結果、父親の「親密な関係尺度」の合計値が、母親・今の親友・故郷の親友のいずれに対しても有意に低かった。

従って、学年があがるにつれて、対象者に対する関係の強さに変化があるとは言えず、父親に対する結びつきが他の対象者よりも低いという点では、従来の結果を踏襲する結果となった (Figure 1)。

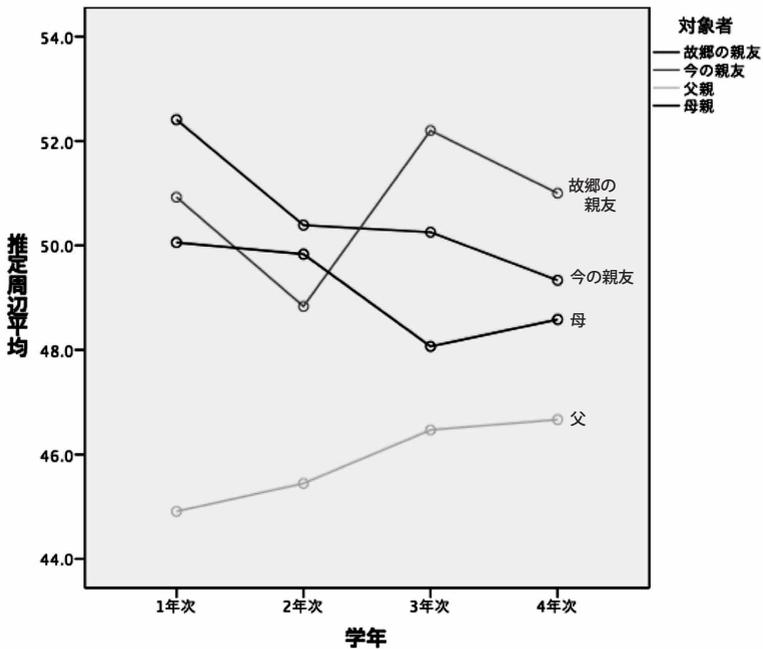


Figure 1. 「親密な関係尺度」の合計

2. 因子別の比較

2-1. 「親密さ」の推移

次に、因子別に検討を加える。「親密さ」因子は「いちばん自分の力になってくれるのは、(相手) だと思う。」「自分を一番理解してくれるのは、(相手) だと思う。」「(相手) は、他の誰よりも相談しやすい。」「(相手) は、誰よりも頼りになる存在である。」「うれしいことや楽しいことは、まず(相手) に報告したい。」の5項目で構成される。「全くあてはまらない(1)～非常にあてはまる(4)」の4件法で得点化され、得点が高いほど親密感を感じていることを意味する。

「親密さ」因子得点を学年(3水準)×対象(4水準)の2要因1変量の分散分析を行ったところ対象の主効果($F(3,354)=9.232, P=.000$)のみが見られ、学年の主効果、学年×対象の交互作用において有意差は見られなかった(Table 3)。

Table 3 「親密さ」因子における2要因分散分析表(学年×対象)

従属変数：親密さ因子

ソース	タイプIII 平方和	df	平均平方	F	有意確率
修正モデル	853.861 ^a	15	56.924	4.381	.000
切片	41438.040	1	41438.040	3189.494	.000
学年	15.328	3	5.109	.393	.758
対象者	359.824	3	119.941	9.232	.000***
学年 * 対象者	45.990	9	5.110	.393	.938
エラー	4599.183	354	12.992		
合計	78382.420	370			
修正総和	5453.044	369			

a. R2乗=.157 (調整済み R2乗=.121)

Scheffeによる多重比較を行った結果、父親に対する「親密さ」因子得点が、母親・今の親友・故郷の親友のいずれに対しても有意に低かった。

従って、学年があがるにつれて、対象者に対する親密さに変化があるとは言えず、父親に対する親密感が他の対象者よりも低いという点では、従来の結果を踏襲する結果となった (Figure 2)。

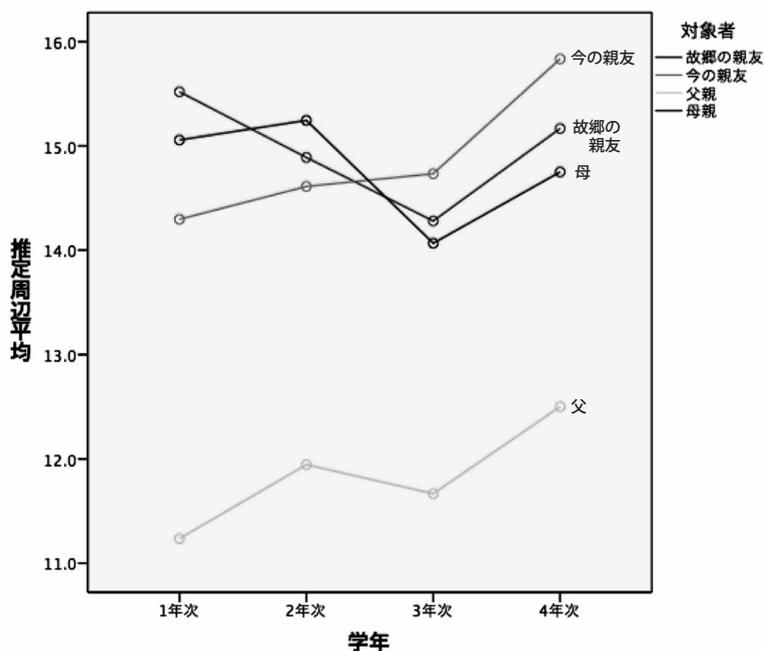


Figure 2. 「親密さ因子」

2-2. 「競争」の推移

「競争」因子は「自分の行動やその結果を、いつも（相手）と比較してしまう。」「（相手）のことを、ライバルとして見ることが多い。」「（相手）がいるために、自分は思うように行動できない。」「（相手）に劣等感や優越感を感じることもある。」「何かをするとき、（相手）だったらどのようにしたり考えたりするだろうと思うことがよくある。」の5項目で構成される。「全くあてはまらない(1)～非常にあてはまる(4)」の4件法で得点化され、得点が高いほど競争関係にあることを意味する。

「競争」因子得点を学年（3水準）×対象（4水準）の2要因1変量の分散分析を行ったところ学年の主効果（ $F(3,354)=2.652, P=.049$ ）と対象の主効果（ $F(3,354)=4.295, P=.005$ ）が見られ、学年×対象の交互作用において有意差は見られなかった（Table 4）。

Table 4 「競争」因子における2要因分散分析表（学年×対象）

従属変数：競争因子

ソース	タイプIII 平方和	df	平均平方	F	有意確率
修正モデル	325.662 ^a	15	21,711	2.632	.001
切片	17282.508	1	17282.508	2095.154	.000
学年	65.624	3	21.875	2.652	.049*
対象者	106.276	3	35.425	4.295	.005**
学年 * 対象者	34.212	9	3.801	.461	.900
エラー	2920.075	354	8.249		
合計	35453.830	370			
修正総和	3245.737	369			

a. R2乗=.100（調整済み R2乗=.062）

Scheffeによる多重比較を行った結果、4年次の「競争」因子得点が2年次のそれよりも有意に低く、両親に対する「競争」因子得点間に有意差はなく、今の親友や故郷の親友に対する「競争」因子得点間にも有意差が見られないが、両親に対する「競争」因子得点と今の親友・故郷の親友のそれとの間には有意差が見られ、親友に対する「競争」因子得点は両親に対するそれよりも高かった。

従って、4年次は他の学年よりも「競争」意識は抑えられ、両親よりも同世代の親友に対して、強くライバル意識をもつことがわかった (Figure 3)。

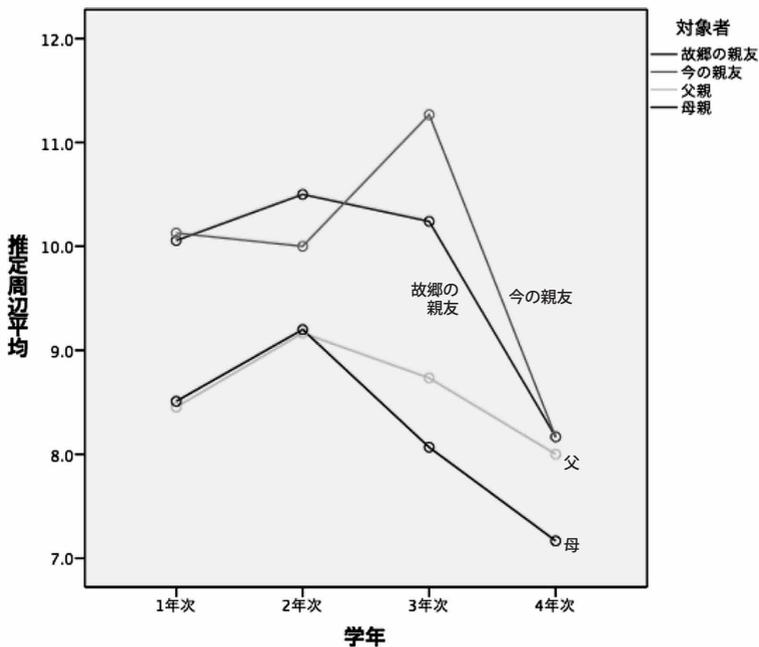


Figure 3. 「競争因子」

2-3. 「分離欲求（束縛感）」の推移

「分離欲求（束縛感）」因子は、「(相手)とはちがう世界で、自分の道を歩みたい。」「自分が自分であるためには、(相手)と距離を保っている必要がある。」「(相手)とは慣れていると、のびのびした気持ちになる。」「どんなことでも(相手)の助けをかりずに自分の力でやりたい。」「自分は、(相手)とちがう人間でありたいと思う。」の5項目で構成される。「全くあてはまらない(1)～非常にあてはまる(4)」の4件法で得点化され、得点が高いほど分離欲求が強く、束縛感を感じていることを意味する。

「分離欲求（束縛感）」因子得点を学年（3水準）×対象（4水準）の2要因1変量の分散分析を行ったところ学年の主効果 ($F(3,354)=2.643$, $P=.049$) が見られたが、対象の主効果と学年×対象の交互作用に有意差は見られなかった (Table 5)。

Table 5 「分離欲求」因子における2要因分散分析表 (学年×対象)

従属変数：分離欲求因子

ソース	タイプIII 平方和	df	平均平方	F	有意確率
修正モデル	206.014 ^a	15	13.734	1.405	.142
切片	26670.407	1	26670.407	2729.104	.000
学年	77.496	3	25.832	2.643	.049*
対象者	71.272	3	23.757	2.431	.065
学年 * 対象者	11.410	9	1.268	.130	.999
エラー	3459.496	354	9.773		
合計	51017.090	370			
修正総和	3665.510	369			

a. R2乗=.056 (調整済み R2乗=.016)

Scheffeによる多重比較を行った結果、2年次は他の学年よりも「分離欲求」意識は抑えられる傾向があることがわかった (Figure 4)。

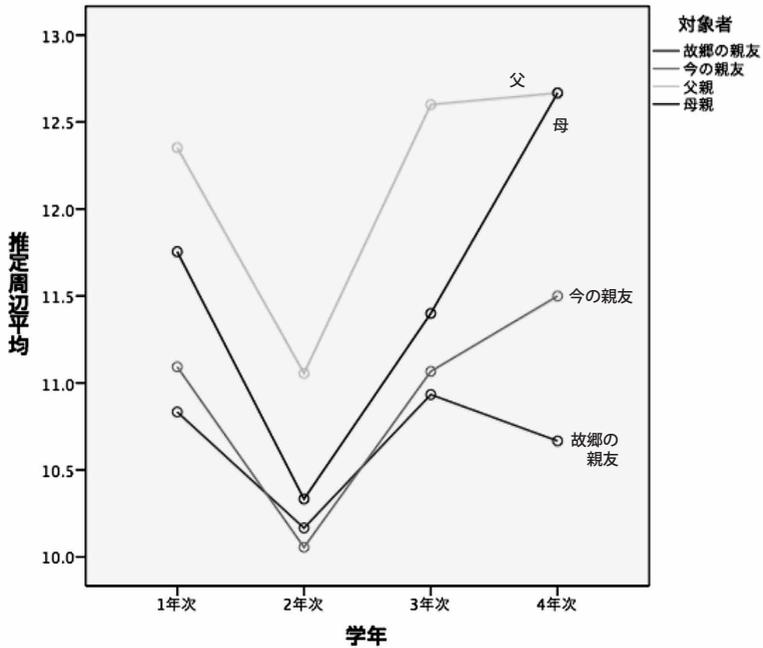


Figure 4. 「分離欲求 (束縛感) 因子」

2-4. 「相手への共感」の推移

「共感」因子は、「(相手) が成功すると、自分のことのようにうれしい。」「(相手) が病気やケガをすると、自分もつらい。」「(相手) が叱られたり、責められたりしたときには、自分がそうされているような気がする。」「(相手) が困っていると、すぐに手をかしたくなる。」「(相手) に何かが起こったとき、じっとしていられなくなる。」の5項目で構成される。「全くあてはまらない(1)～非常にあてはまる(4)」の4件法で得点化され、得点が高いほど共感していることを意味する。

「共感」因子得点を学年(3水準)×対象(4水準)の2要因1変量の分散分析を行ったところ対象の主効果 ($F(3,354)=4.329, P=.005$) のみが見られ、学年の主効果、学年×対象の交互作用において有意差は見られなかった (Table 6)。

Table 6 「共感」因子における2要因分散分析表 (学年×対象)

従属変数：共感因子

ソース	タイプIII 平方和	df	平均平方	F	有意確率
修正モデル	382.124 ^a	15	25.475	2.709	.001
切片	43978.469	1	43978.469	4676.729	.000
学年	10.839	3	3.613	.384	.764
対象者	122.137	3	40.712	4.329	.005**
学年 * 対象者	51.655	9	5.739	.610	.788
エラー	3328.903	354	9.404		
合計	82814.000	370			
修正総和	3711.027	369			

a. R2乗=.103 (調整済み R2乗=.065)

Scheffeによる多重比較を行った結果、父親に対する「共感」因子得点が、母親・今の親友・故郷の親友のいずれに対しても有意に低かった。

従って、父親に対して、他の対象者よりも距離感があることがわかった (Figure 5)。

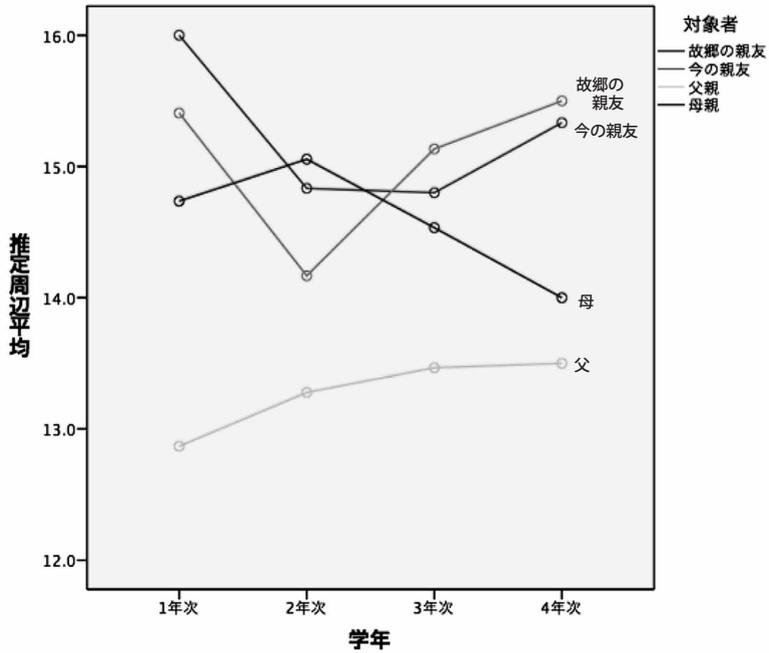


Figure 5. 「共感因子」

3. 個人の関係性の推移

3-1. 2名のケースの概要

ここでは、男女各1名に関し、4年間の追跡結果を示す。

ケースA（男子学生）は、実家が東北C県にあり、5人家族の中で長じ、大学入学を機にアパートで一人暮らしを始めた。大学では球技系のサークルに4年間所属している。1年次からソーシャルネットワークサービスを利用し、家族への連絡手段も入学当初は電話やメールだったが、1年次の冬にはLINEにかわり、長期休みには数日ずつ帰省している。父親は実家にいないことも多いようで、1年次の10月と1月の調査以外では、家族構成について父を除き4人家族と記載している。

ケースB（女子学生）は、実家が東北D県にあり、猫と6人家族の中で育った。大学入学を機にアパートで一人暮らしを始めた。大学では実力が全国レベルの運動部に4年間所属している。家族への連絡手段は主に電話やメールである。夏休みや冬休みには1週間ほど帰省している。友人間では1年次からソーシャルネットワークサービスを利用している。

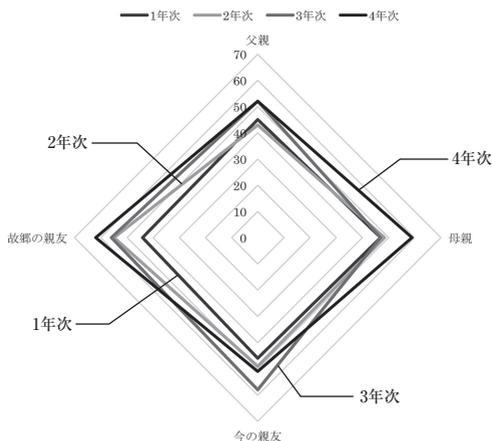


Figure 6 : Case A ; 関係性の強さ

両者の関係性の強さをグラフにすると、Figure 6と7のようになる。

故郷を離れた大学生にみられる対人関係の推移

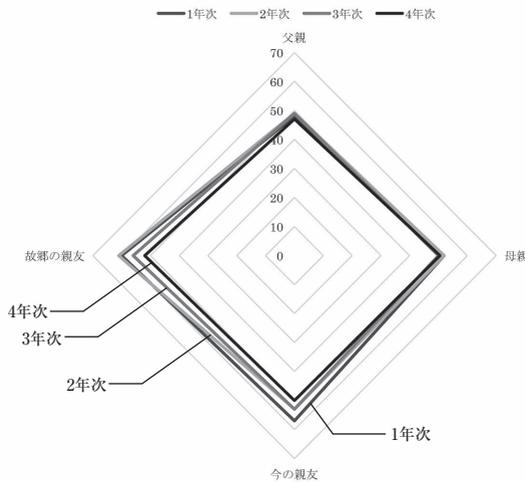


Figure 7 : Case B ; 関係性の強さ

ケースAはケースBと比べ、対人関係に関して今の親友を除けば、徐々につながりを強く感じている。特に母親と故郷の親友に対し、4年次に関係性が強くなっている。一方ケースBは、学年を問わず関係性を保っており、両親よりも友人への結びつきを強く感じている点が顕著である。

3-2. ケースAの関係性の推移

ケースAの対人関係を図示すると、Figure 8から11のようになる。

どの対象に対しても2年次に分離欲求(束縛感)を感じていない一方で、4年次には強く感じており、誰からも構って欲しくないという気持ちが読み取れる。2年次は、初めての一人暮らしで全てが目新しく、気楽さも経た上で、今の親友を大切にしながら、現実には距離のある故郷の家族や親友に対する寂しさも感じていたため低い分離欲求につながっていたのではないだろうか。また、4年次に分離欲求が高まったのは、卒業と就職を意識する4年生となり、自分の進路を心配する親やライバルとなる友人と距離を取りたい気持ちが出てきたためではないかと思われる。

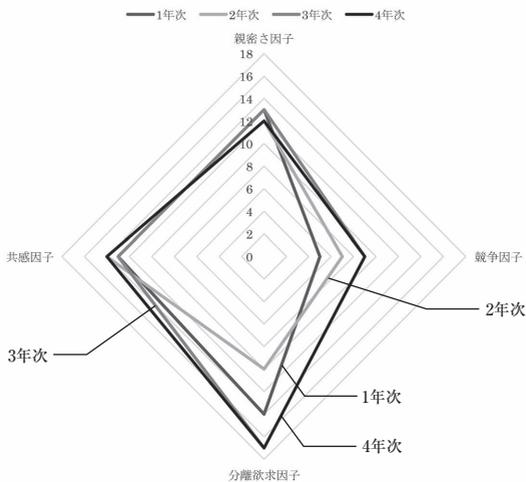


Figure 8 : Case A ; 父親との関係

父親とは、今の親友と同じ程度に親密さを感じにくく、一定の理解を示しつつも距離を感じている結果がうかがえる。

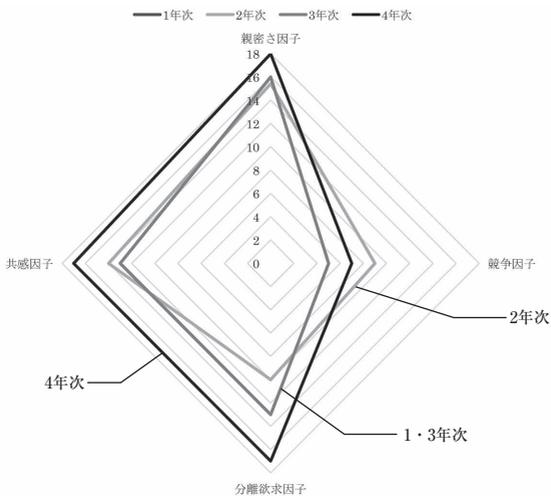


Figure 9 : Case A ; 母親との関係

平均的に母親に対して親密さ因子と共感因子の得点が高い。男子学生であるケースAに母親との親密な関係性が見られる点は、おそらくこの学生の家族関係が起因するものと思われる。家族構成で1年次の秋と冬の調査では弟妹を含み5人家族と記載していたが、そのほかの時期は父親の記載がなく、実家にいる家族は自分を含み4人家族としていた。父親の不在理由は明らかではないが、不在の父親に代わり長男として母や家族を支えたい気持ちが母との親密さに反映されているのではないだろうか。

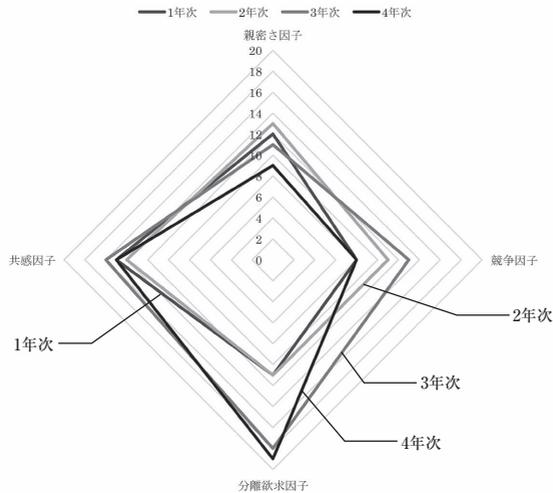


Figure 10 : Case A ; 今の親友との関係

学年が上がるにつれて故郷の親友との間に最も強い関係性が見られるが、その内訳は学年での様相が異なっており、1年次は親密に感じていた気持ちは徐々に分離欲求へと転じ、1年次に感じていなかった競争因子が徐々に自覚されながら、共感する気持ちも顕著になっている。これは、故郷を離れ、心理的な距離感も出てくる中で、離れた土地でそれぞれに頑張っている自分たちにエールを送るような気持ちになっていった結果ではないかと思われる。

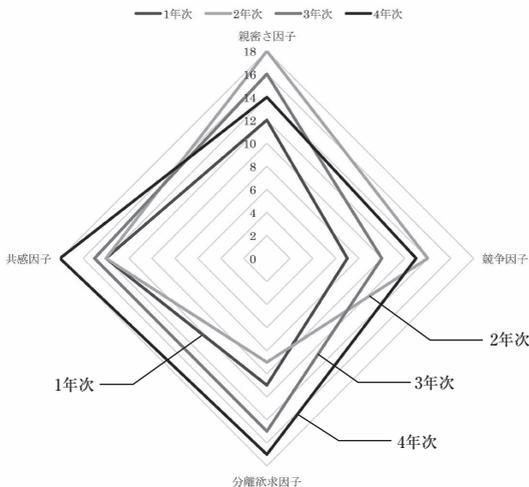


Figure 11 : Case A ; 故郷の親友との関係

3-3. ケースBの関係性の推移

ケースBの対人関係を図示すると、Figure 12から15のようになる。ケースAに比べ、どの対象とも強い関係性を維持し、学年による差も少ない。その中で、2年次に母と故郷の親友に対して「競争」意識が高くなり、「分離欲求」が強くなっていることがうかがえる。

男子学生であるケースAと比較し、女子学生のケースBは分離欲求の低さが顕著である。ケースBは全国レベルの実力を有する部活動に所属し、学業のほか週30時間を超える練習を日々実践している。部活動の大きな大会には両親や故郷の友人が応援に駆けつけ、定期的に両親や故郷の友人と連絡を取り合っている。まさにDuckが述べた「関係の維持」が図られているケースである。実際に離れていても、離れたい気持ちの強いケースAと離れたい気持ちが抑制されるケースBについて、性差に由来するのか、もしくはホームシックが関与しているのか、今後の検討が必要と考えられる。

故郷を離れた大学生にみられる対人関係の推移

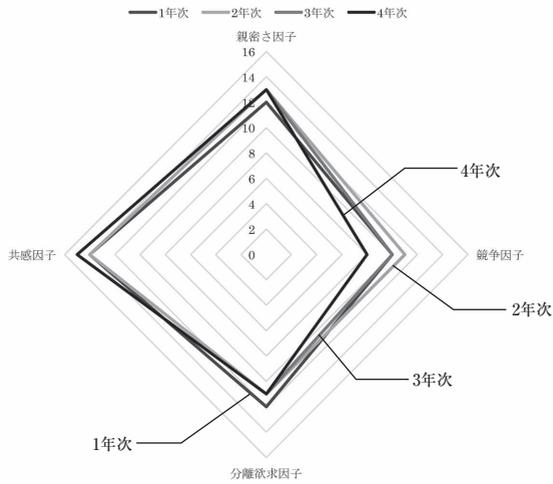


Figure 12 : Case B ; 父親との関係

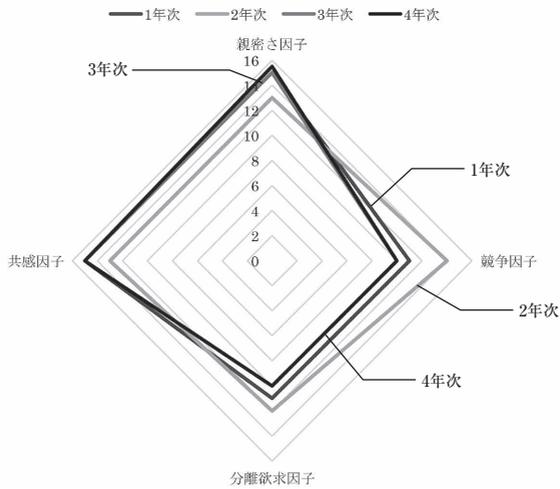


Figure 13 : Case B ; 母親との関係

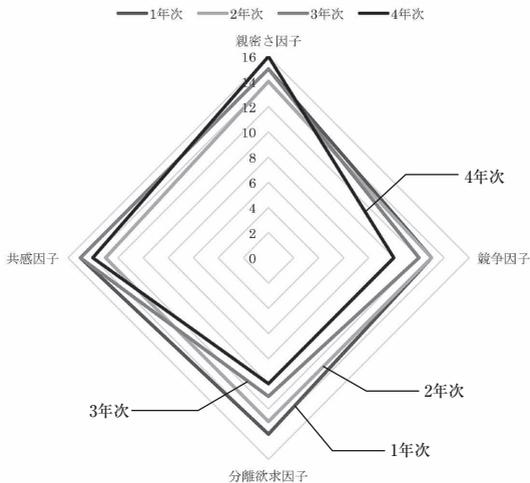


Figure 14 : Case B ; 今の親友との関係

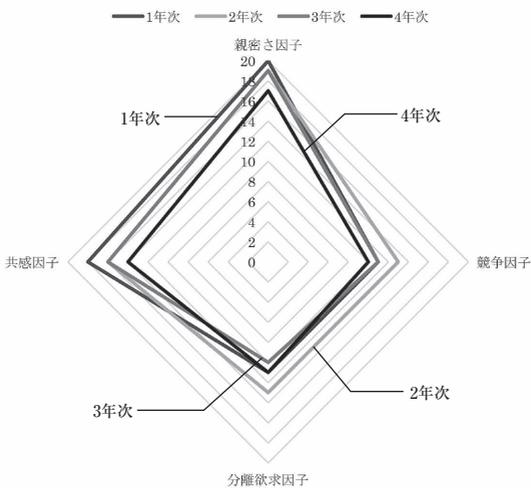


Figure 15 : Case B ; 故郷の親友との関係

総合考察

Duck (1991, 仁平監訳, 1995) によれば、「大学での最初の1年(学年は秋にスタートする)のうちでは、前期の終わりのクリスマス休暇が大学での友人関係を固める上で果たす役割は、想像以上のものがある」。日本では、春に最初の1年がスタートするので、転機は夏休みの帰省にあると思われる。「学生たちは帰省して以前の級友に会いたいと考える。しかし、自分自身も故郷の友人も変わってしまっていることに驚き、ろうばいする結果になる。」(前述, 1995)

しかしながら、今回の研究ではほぼ2ヶ月ある夏休み期間中の帰省もしない学生がおり、帰省していない学生の中にはオンラインビデオチャットを利用するとの回答も見られたため、Duckが研究した頃とは異なる要素があるように感じられた。

統計的検定の結果、今の親友と故郷の親友、両者間で対人関係の意識の違いはみられなかった。また、学年間における関係性の推移に有意な差は「競争」因子と「分離欲求(束縛感)」因子に見られ、2年次に「分離したい気持ち」が意識されなくなり、4年次に「ライバル意識」が意識されなくなるという傾向だった。対人関係の調査は、概ね4月に実施している。2年次4月の分離欲求の減少は、一人で1年間を過ごした結果、分離欲求が満足された側面と寂しさを意識したホームシックによる側面とがあるのではないかと思われる。4年の4月は就職活動が佳境で、すでに内定をもらった学生もいれば、これから就職試験に臨むものもおり、ライバル意識が高まることも予想される時期である。従って4年次に「ライバル意識」が意識されなくなることは理解に苦しむ結果と言えるが、同世代の、特に「親友」とは就職戦線をとともに協力しながら戦う「同志」としての関係性が強くなったためではないかと思われる。同時に、大学生時代全体を通じてみると両親よりも同世代の親友たちを「ライバル視」することは、入試、定期試験、部活動の成績、人生経験の豊かさなどを比較する相手として、当然の結果である。今回の結果では学年と対象者の間における交互作用に

統計的な有意差は認められていないが、Figure 1 では、学年があがるにつれて両親への関係性の強さは弱まり、2年次から3年次にかけて今の親友との関係性が故郷の親友との関係性よりも強くなり、Duck（前掲）がいうような、逆転現象が生じている傾向がうかがえる。研究参加者が増えることによって、有意な傾向となるのか、このまま誤差の範囲で留まるのか確認することも今後の課題である。

父親とのつながりの希薄さが今回の結果の特徴である。父親との「親密さ」「共感性」が母親のそれよりも低くなることは、日本社会では珍しいことではない（仁平，2002）。しかしながら、「競争」意識においても「分離欲求」についても目立つ特徴がないということは、大学生が父親に対して「無関心」であることを示していないだろうか？ 昨今では、奨学金を借りている学生も珍しくなく、アルバイト代で生計をたてている学生もいる。「経済的な側面を支える」父親の存在意義が見だしにくい社会情勢を反映した結果ではないかと思われる。

謝辞

本報告を含む一連のホームシックに関する研究は、仁平義明先生からアイデアを含め、たくさんの指導をいただいて遂行することができました。ここに記し、感謝申し上げます。

引用文献

- Duck, S. (1991). *Friends, for life: The psychology of personal relationships*. 2nd ed. London: Harvester Wheatsheaf. (仁平義明（監訳）(1995). フレンズ：スキル社会の人間関係学 福村出版)
- 伊崎純子 (2012). ホームシック研究の現状, 白鷗大学論集, 27(1), 309-331
- 伊崎純子 (2015). 大学生のホームシックと対人関係の推移 — 入学から4年間の縦断研究 —, 日本心理学会第79回大会発表論文集

- LaFleur, V. V. (2010). Acculturation, social support, and self-esteem as predictors of mental health among foreign students: A study of Nigerian nursing students. *Dissertation Abstracts International*, 71.
- 仁平義明・大平直 (2008). 双生児の親密さとアイデンティティ — 神話と事実 —, 東北大学文学研究科研究年報, 57, 45-71.
- 仁平義明 (2002). ほんとうのお父さんになるための15章, プレーン出版
- Roberts, S.G.B. & Dunbar, R.I.M. (2011). The costs of family and friends: an 18-month longitudinal study of relationship maintenance and decay. *Evolution and Human Behavior*, 32, 186-197.
- Van Tilburg, M. L., Vingerhoets, A. M., & Van Heck, G. L. (1996). Homesickness: A review of the literature. *Psychological Medicine*, 26, 899-912.